

トコロガとシカシ

逆接接続語と談話の類型

浜 田 麻 里*

キーワード： 逆接，転換，話者関与性，物語性

要 旨

逆接接続語には、(1) トコロガと (2) シカシに代表されるもの、の二つの類型が存在する。本稿ではトコロガ類とシカシ類の違いをその「基本的意味」の違いとして分析する。

トコロガの基本的意味は、p(前件)とq(後件)が話し手によって意図的に対比されていることを示すことである。一方、シカシの基本的意味は、あることがらにpという側面が存在すると同時に、それと異なるカテゴリーに属するqという面が存在するというを示し、「qに注目せよ」ということを表示することである。このように基本的意味を記述することにより、シカシ類の持ついわゆる「話題の転換」の機能も逆接の機能と同様の原理から説明することが可能になる。

また、両者の違いを明らかにする過程で、トコロガとシカシの違いが日本語の談話の構成の類型にも関わっていることが示唆される。

1. 問題のありか

現代日本語には逆接接続語¹と呼ばれるものが多数存在するが、細かく観察していくと、個々の形式の間にはさまざまな違いが見出される。

たとえば、二人の話し手が議論をしている文脈で、デモは反論している側の話し手の発話の冒頭部に現われることができるが、トコロガは出現不可能である。

(1) 晴江「[私は] エゴイストなの。人の面倒見るタイプじゃないのよ。」

良雄「 { でも } 君、評判いいって言うじゃない。」 (『II』)
 { *ところが }

また、シカシには「話題の転換」と呼ばれる機能が存在するが、トコロガにはない。

* HAMADA Mari: 元国際交流基金日本語国際センター日本語教育専門員、現大阪大学留学生センター助教授。

¹ 接続語は接続詞とほぼ重なるものだが、品詞論では接続詞に分類されるかどうか異論があるもの、一語と認めがたいものなどでも、文と文を接続することができる形式をまとめて接続語と呼ぶことにする。

- (2) おすぎ「スッゴイッ、輝さんて偉い。ゲイにはね、ふたとおりあるんだってことを言った人ははじめて。私がいくと冗談でお尻を押さえたりする人が多いのに。」

宮本「変な点をほめられたな。」

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{しかし} \\ \text{*ところが} \end{array} \right\} \text{何という対談をやっとするのか、われわれは。}$$

(『メ』)

逆接接続語を(1)や(2)の文脈に現われるかどうかという観点からみていくと、ケド、ケレドモ、ダガ、ダケド、デスガ、デスケドなど、ほとんどのものはシカシやデモなどと同じく(1)や(2)に用いることができるが、トコロガは用いることができない。このことは日本語の逆接接続語にはシカシに代表されるものとトコロガとの二つの類型があり、それぞれ異なる機能を分担していることを示唆するのではないだろうか。これら二つの類型間の違いをどのように捉えたいだろうか。

以下の文中では、主にシカシを代表にとってトコロガと比較していく。シカシと同類型に含まれる形式については、本稿の範囲ではシカシと同じ性質を持つとみなし、区別せずに例を引くことがある。また、意味的・機能的に接続語が接続している内容について、接続語の前の部分、いわゆる前件をpとし、接続語に後続する部分、後件をqとする。したがって、シカシとトコロガの分析を「p シカシ q」のように簡略化して表すことがある。

2. 先行研究

2-1. 逆接接続語研究の概観

従来、さまざまな観点から現代日本語の逆接接続語の用法の記述が試みられてきた(塚原 1969, 佐治 1970, 市川 1972, 1978, 永野 1984, 他)。また、最近では談話分析的観点からの記述も行われるようになり、日本語については岩澤(1985)、多門(1992)、佐久間(1990)などが考察を行っている。また、渡部(1989)は対照言語学的観点から逆接接続語の機能を分析している。これらの諸研究においては逆接の意味を表す形式が談話において持つ機能が関心の中心であり、個々の形式の意味機能の違いはあまり取り上げられていない。

また、逆接接続語個々の意味機能の相違も取り上げられてはきた(横林・下村 1988, 森田 1989, 北野 1989)が、これらの分析にも問題がないとは言えない。たとえば森田(1989)は、シカシの用法の起源が古代語において「そのような状態のままです」という意味で用いられていた「しかしながら」の「ながら」が落ちたものであるところから、シカシの用法をpの内容を「いちおう認めながらも、“それはそうとして” 軽い異議の申し立てを添える(p. 188)」としている。しかしながら、トコロガの後件においても、シカシ同様pの成立は認められている。たとえば(3)でp部の内容は過去に存在した事実であり、それを否定することは不可能である。

- (3) 全国人民代表大会はこれまでは共産党中央の決めた方針をほとんど満場一致で承認してきた。ところが、今年の全人代は李鵬首相の政府活動報告に 150 ヲ所もの修正を加えて可決し、閉会した。(朝日 92.4.4)

つまり森田の記述は逆接であればシカシであれトコロガであれ等しく適用できることになってしまい、両者を区別するには不十分と言わざるをえない。

2-2. 「話者関与性」

一方、北野(1989)は、横林・下村(1988)の記述を発展させ「話者関与性」という概念を用いてシカシとトコロガの違いを分析している。たとえば、シカシとトコロガには後件に取るモダリティーの種類において、次のような違いがある(例は筆者による)。

- (4) リビアが言を左右にしたことが、国連やアラブ連盟などを振り回したことは事実だ。

{ しかし } 今後もアラブ連盟は、国連と密接な連絡を取り続けてほしい。
{ *ところが } (朝日 92.4.2)

- (5) 引退して評論家的に陸上競技に関わっていくのは確かに楽かもしれない。

{ しかし } それでは自分の選手を作ってこなかったことをいつかは後悔することに
{ *ところが }

なるだろう。

(『普』)

- (6) 私はいろいろ苦勞してきた、たいていのことは我慢できる。

{ しかし } これにはさすがに腹が立つ。
{ *ところが }

北野はこの現象を、トコロガが後件 q に「話者関与性」の強い述語を取ることができないために起ると説明する。「話者関与性」とは「話者が命題を構成するための情報をどのようにして手に入れたかということに関する概念」であり「情報に関する責任を、話者がどの程度負っているかを示す(北野 1989: 39)」。話者関与性が強く、トコロガの後件に現れることができない述語には次のようなものがあるとされている。

○働き掛け[命令(ナサイ)、禁止(ナイデクダサイ)、誘い掛け(マセンカ)など]・問い掛け・表出(ツモリダ、タイなど)のモダリティー

○(推量の)ダロウ、マイ

○狭義判断[カモシレナイ、ニチガイナイ、ハズダ]

○話者の心理・感情、判断・態度、意志、個人的情報

○受動文

ただ、冒頭に掲げた例でトコロガが使えないことは、話者関与性だけでは説明できない。

- (1) (再掲) 晴江「私は」エゴイストなの。人の面倒見るタイプじゃないのよ。」

良雄「 { でも } , 君評判いいって言うじゃない.
 { *ところが }

(1) と後件 q は同じであっても次の (1') のように前件を少し修正すると、シカシもトコロガも出現可能になってしまう.

(1') 君はエゴイストだ, 人の面倒見るタイプじゃない, と思っていた.

 { しかし } , 君, 評判いいっていうじゃない.
 { ところが }

北野の説に従うと, (1') が成立するならば, q の話者関与性は低いはずである. だが, q の話者関与性が低いとすると, 今度は (1) でトコロガを用いることができない理由を説明することができなくなってしまう. この現象はトコロガとシカシの違いを考える際には, p の性質も考慮すべきだということを示唆しているものと思われる. また, 北野自身も認めているが, シカシの話題転換の機能も「話者関与性」の観点からは考察されていない.

このように, 北野の提示した「話者関与性」という概念は非常に示唆的ではあるが, シカシとトコロガの違いを十分説明しているとは言えないようである.

2-3. 本稿の立場

本稿では, 以上のような先行研究が残してきた問題を補いつつ, 考察を進めていきたい. 本稿の当面の目標は, トコロガとシカシの「基本的意味」を整理することである. 接続語の基本的意味とは, 前件 p と後件 q がどのような関係であるかを表示することであると考えことにする. 接続語は談話上でさまざまな機能を持つが, この機能は各々の基本的意味から来るというのが本稿の立場である. 基本的意味を明らかにするためには, トコロガとシカシが持つ構文的語用論的特徴を分析し, それらの特徴と各形式が持つ機能との関連性を検討することが必要であろう. そこで, 以下ではまず, トコロガとシカシの構文的語用論的特徴を両者の違いを中心に見ていくことにする.

3. シカシとトコロガの相違

3-1. トコロガと話し手の知識

先にも述べたように, トコロガとシカシの違いには q の話者関与性の高低だけでなく, p の性質も関わっていると思われる. そこで, p の性質に着目してみることにしよう.

(7) A 「明日デパートは休みでしょう?」

B 「 { しかし } 広告に明日からバーゲンだと書いてあったんですよ
 { ところが }

(8) A 「明日デパートは休みでしょう?」

(9) ホームズ「何だ、あの女性には振られたのか」

それでは手が出せない」

(『華』)

このように、トコロガについては、 p という発話の生起の可能性がトコロガの話手の知識の中に存在していなければならないという特徴がある。

3-2. シカシの特徴

今度は、シカシの構文的特徴を考えてみよう。

(10) 張は、低く、 $\left\{ \begin{array}{l} \text{しかし} \\ * \text{ところが} \end{array} \right\}$ 有無を言わせぬ調子でつぶやいた。

(11) それは簡単なようにみえて、 $\left\{ \begin{array}{l} \text{しかし} \\ * \text{ところが} \end{array} \right\}$ むずかしい計画だった。

(12) [その男は] 町から三十マイルほど離れた鹿の森(エルク・ウッド)と呼ばれるインディアン保留区(リザベーション)の首長の一族とかで、様子にどこか肩を怒らせているような傲慢な構えが見え、 $\left\{ \begin{array}{l} \text{しかし} \\ * \text{ところが} \end{array} \right\}$ 白人の若い娘たちに人気があるらしく、何人

もの娘たちと派手やかに連れ立っていることが多かった。(『モ』)

これらの例は一見、トコロガは文頭にしか現れないということを示しているように見えるが、同じ文頭以外の位置でも

(13) 太郎はすぐ戻ると言って出ていったが、ところが1時間経っても戻らなかった。

のように、p と q が継時的な関係にあることがらを表す場合は、トコロガを用いてもさほど適切さが落ちない。したがって、(10)から(12)に見られる現象は、シカシは一文の中で修飾成分や状態性述語を接続することができるが、トコロガはできない、ということを表していると分析できる²。

次章の内容を先取りすることになるが、ここで意味的側面から p と q の関係を考えておく。(10)から(12)において p と q は何らかの事物の属性を示している。つまり、p と q は一つのことがらの二つの側面を示していると思われる。

次に、p と q で述べられた内容が意味的にどういう関係にあるかを明らかにするために、しばしばシカシと対照的に取り上げられるソシテと対比してみると、

(14) a 甘く、そして危険な香り

b 甘く、しかし危険な香り

ソシテを用いた場合、「甘い」と「危険な」は同じく「香りを描写することば」というカテゴリーに属し、シカシの場合には、「甘く」は対象に快楽をもたらす「有益なもの」、「危険な」は対

² ただし、シカシ類の接続語の中で、デスカ、デスケドのようにデスを構成要素に含むものはこの文脈には出現しにくい。これはデスのもつ丁寧さの要因が文中への出現を制限していることによると考えられよう。

象に害をもたらすかもしれない「有害なもの」という異なるカテゴリーに属すると考えられる³。

このように、シカシは意味的に異なるカテゴリーに属する p と q が同時に存在するということを示す。

4. トコロガとシカシの基本的意味

本節では前節 3. で明らかになった特徴を踏まえて p と q の関係やトコロガとシカシの機能を検討し、さらにはトコロガとシカシの基本的意味を考えてみたい。

4-1. トコロガの基本的意味

「 p トコロガ q 」においては、 q の話し手の中に p の発話の生起が予想されていなければならないと言うことはすでに述べた。とすると、もし q の話し手が p を予想しているとするならば、 p の後に自分が q を発話することまでもが、話し手の中のスクリプトとして存在していたとは考えられないか。実例で確かめてみる。

(15) 宮本「うちでいまハンガリーの青年を預っているんです。だいたい西洋人ってみんな英語がしゃべれると思ってるでしょう。」

杉浦「思います。」

宮本「 $\left\{ \begin{array}{l} \text{ところが} \\ \text{??しかし} \end{array} \right\}$ 彼は、フランス語はゆっくりしゃべってくれたらわかる。

スペイン語はペラペラ。英語はぜんぜんわからない。ジス・イズ・ア・ペンもわからない。こういう、日本人から見ると、不思議な西洋人なのね。」 (『メ』)

q 「彼は……不思議な西洋人だ」と言う宮本にとって、その直前に杉浦が p 「(西洋人はみんな英語がしゃべれると思う)」と発話するであろうことは予想されていたのではないか。さらに、杉浦が p と言ったら自分は q というということもスクリプトの中に書かれていた。つまり、(15) では q が聞き手杉浦に驚きを伴って劇的に伝達されるよう、予め杉浦に p 「(西洋人はみんな英語がしゃべれると思う)」と言わせておいたと考えられるのである。

従来トコロガについては、シカシとの比較で直感的に「感情的(岩澤 1985)」「想像する方向と大はばに違うことを表す(森田 1989)」と記述されてきたが、このようにシカシよりトコロガの方が、 p と q の対比をより鮮明に示すことの背後には、 q の話し手が聞き手にとって p と q との対比が明確になるようにスクリプトを作っているということがあるのであろう。これは話し手

³ もちろん、ソシテとシカシの違いは何かということは、「並列」と「逆接」の意味論的本質に関わる問題であり、まだ多くの解決すべき課題がある。ここでの考察は暫定的なものと考えられたい。詳しくは機会を改めて考察する。

が p から q への話の進展が聞き手にとって驚くべき内容であることを知っているから可能なのである。p と q の話し手が同じである「独話」文脈の場合、この機能をかなり効果的に用いることができる。

- (16) 疑問文や否定文のとき普通動詞では do という助動詞をつかって疑問文や否定文を作りましたネ。ところが be 動詞は、いいですか大事なところよ。覚えるのよ。きょう中に覚えるのよ。この be 動詞を疑問文や否定文にする時には助動詞はいりません。

(録 230)

(16) では、自分が聞き手にとって予想外の情報を提示することを充分承知しながら、p を提示しており、p と q の対比は予め話し手によって意図的に設定されたものである。つまり、意図的に q の前に p を提示することにより、話し手は p と q の対比を効果的に聞き手に伝達しているのであるということができよう。このような機能はシカシにはない⁴。これがさらに極端になると、トコロガを用いることにより、話し手が聞き手よりも多くの情報を持っていることを誇示することになる。次の例は情報誇示の効果をうまく利用している。

- (17) スイスの時計、何個知ってる？ラドー、テクノス、オメガ、ローレックス、まあまあ知ってってインターナショナル、この程度や。ところが時計のメーカーなんてざっとゴマンとあるんや、スイスへ行けば。こんな見たらやんなるぞ、これ。(録 329)

一般にはトコロガはシカシ類の接続語に比して、対話に現れる頻度が少ない。これには自分の持つ情報を誇示することを回避するという待遇の配慮も関わっているのであろう。なお、(17)のトコロガをシカシに置き換えることも可能だが、置き換えると、ここで述べたような機能は生じなくなる。

ここまで述べてきたことすべてを考慮しながら、トコロガの基本的意味を考えてみることにする。q の話し手が p を予想しているということには何度も言及してきたが、シカシと同じ文脈に現れうる(16)(17)にも観察されるトコロガ独特の効果を念頭に置くなら、実は単に p を予想しているか否かではなく、p を知っていることにより p と q を意図的に対峙させることが可能になるという点にトコロガの真髄があるのではないだろうか。

このことを確認するために、次のような実況放送を考えてみる。実況放送では、ゲームの進展にともない新しい情報が次々に入力され、話し手であるアナウンサーはそれを逐次言語化しているかねばならない。したがって、談話の計画を予め立てることはほとんど不可能である。

このような文脈では、

- (18) つまった当たりの内野ゴロ…… ああ、 $\left\{ \begin{array}{l} \text{しかし} \\ \text{*ところが} \end{array} \right\}$ これをショートが悪送球。

⁴ たとえば、話し手が聞き手の予想を裏切ることを示すのに、「ところがどっこい」という言い回しがあるが、シカシ類には「しかしどっこい」「けれどもどっこい」という言い方は存在しない。

と、トコロガは不適當である。それに対し、ゲームの結果を報告する場面(たとえばスポーツニュースにおけるナレーション)ならアナウンサーはゲームの経過を劇的に伝えるために談話を組み立てることができる。その場合には、

(18') つまった当たりの内野ゴロ…… $\left\{ \begin{array}{l} \text{しかし} \\ \text{ところが} \end{array} \right\}$ これをショートが悪送球。

となり、トコロガを用いることが可能になるのである⁵。

以上のように、トコロガの p と q は対比的な内容で、その対比は話し手によって意図的に設定されたものであることがわかった。よって、トコロガの基本的意味とは「p と q が話し手によって意図的に対比されていることを示すことである」と結論づけることができよう。なお、このように話し手がスクリプトに沿って話を進めていく典型的な談話は物語文 (narrative) である。トコロガの用いられる文脈としてもっとも多く見られるのもこの種の談話である。

4-2. シカシの基本的意味

3-2. で見たように、シカシは意味的に異なるカテゴリーに属する p と q が一つのことがらについて同時に存在するというを示す。これを別の面から見ると、シカシを用いることによって次に続く q が p とは相容れない内容であることを示す、ということになる。これは、シカシの反論を行う機能と関わっている。

(19) A 「そんなものを見たって、なんの得にもならないでしょう」

B 「でも、放つといたら、いつまでも勝手なことをされるわ」 (『別』)

(19) は夫の浮気について、妻 B とその女友達 A が、それを「黙って見逃す」のと「問い詰める」のとどちらがよいかを議論している場面である。ここで、A の発話 p 「そんなものを見たって、なんの得にもならない」と B の発話 q 「放つといたら、いつまでも勝手なことをされる」はどちらも夫の浮気に関する側面であるが、対立するカテゴリーに属するため、q の前にシカシが用いられている。また、相手が自分の考えと異なる内容の発話 p をするように意図的に操作するということは「議論」というものの性質上起りにくく、トコロガは不適當である。このように、シカシを用いることにより、p を提示する話し相手に対し、「別の面 q が存在する」ということを示し、それによって相手の p が最終的な結論となることを留保させることができる。これがシカシの反論の機能である。

なお、q が省略されている場合でも、シカシ類の接続語を用いるだけで、q に後続するのは p への不賛同を表す内容であることが示される。

⁵ 談話の計画性の高低と英語の談話の特徴については、Ochs (1979) の先駆的な研究があるが、日本語のような接続語の使い分けは英語には見られないようである。

(20) リカ「帰る」

永尾「送って行こうか、駅まで」

リカ「いい」

永尾「けど」

(『東』)

「けど」の後に省略されている q が p と同時に存在しかつ p と相容れない内容 (たとえば「夜も遅いから危ない」など)であることは容易に理解できよう。

以上を総合すると、シカシの基本的性質とは、ひとつのことがらについて、p という側面が存在すると同時に、それと異なるカテゴリーに属する q という面が存在するということを示し、結果として「q にも注目せよ」ということを表示することである。なお、(19) (20) のシカシ(ケド)はトコロガとは置き換えられないことは言うまでもない。

4-3. シカシの話題の転換の機能について

シカシの基本的意味を考えることの目標の一つは、これまでシカシの中で「話題の転換」と言われてきたものを逆接のシカシと同じ原理で説明することである。シカシの基本的意味で、次のような話題の転換の機能が説明できるだろうか。

(21) 杉浦 一応、読者を想定して、はい、いつも書いてますけど。

宮本 やっぱり。しかし、その「はい」っていうの、やめてくれませんか? (『メ』)

(22) 夏恵「すみませんでした」

相馬「いやあ、はじめっから、いいっていつてるのに。フフ。しかし、いまの若い人は羨ましいねえ。ああいう温和しいんでも、こうやって複数の女性と、なんてことなくつき合ってるんだから。」

(『II』)

シカシの基本的意味は、「ひとつのことがらについて、p という側面が存在すると同時に、それと異なるカテゴリーに属する q という面が存在するということを示し、q に注目させること」である。このうち、「p と異なるカテゴリーに属する q の提示」という点は、話題の転換に深く結びついている。(21)において、p では杉浦の作家としての態度が言語的情報として提示されているのに対し、q では杉浦の話し方に内容が及んでいる。この時、話し方という談話のメタ的側面を取り上げることによって、それまで内容という側面に対して向けられていた注意が、メタ的な側面へと移り、転換の機能が果たされている。(22)では、p で女性(夏恵)が男性(「ああいう温和しいの」と言及されている男性)の職場に訪ねてくることの是非が話されていた(「……いいっていつてるのに」)が、シカシ以後の発話 q の内容は今の若者に言及するものになっている。つまり、話し手は p とは別の q を提示することにより話題の転換を行っている。

ところで、(21)のような例は、一つの談話の二つの側面と捉えることが可能だが、(22)のように同一のことがらに言及していない時の p と q もひとつのことがらの二つの側面の延長線上で

理解できるのだろうか。この疑問に答える手がかりとして、他の話題の転換の接続語、トコロデやサテをシカシと比較してみることにする。トコロデやサテの用例には(23)や(24)のようにシカシで置き換えられないものがある。

(23) 首相はこのあと15日に帰国の予定です。

{ さて } 次はちょっとほほえましいニュースです。
{ *しかし }

(24) 「家政科? 姉さんが家政科?」(中略)

「どこだって同じよ。どうせ結婚しちゃえば、終わりよ」

「へえ。家政科かあ。」こういう時になにをいっても、どうせ姉は聞こうとしないのだ。

{ ところで } さ お母さんだけさ
{ *しかし }

「なによ?」

「浮気、やめさせたよ」

(『岸』)

(23)は、独話のニュース報告で、「首相」と「ほほえましいニュース」というまったく関連性のない話題がサテで接続されている。また、(24)は対話であるが、やはりpでの姉の進路とまったく関連性のない話題(お母さんの浮気)がqで導入されている。このような時にはシカシを用いることができない。

一方、シカシ類によって導入される話題は、先行文脈と無関係なまったく新しいものではなく、会話の参加者の共有知識に何らかの形で導入済みでなければならない。(22)のq「いまの若い人……」は、話し手が今しがた目撃した状況に対するコメントであり、聞き手夏恵はその当事者である。ゆえにその内容は話し手にも聞き手にも既知であり、談話の文脈に導入されているとみなしてよい。

会話の参加者間で共有されているかどうか未確認のことがらの場合は話題としてシカシで導入できないことは次の例から確認できるだろう。

(25) { ところで } 八景島って、知ってますか。
{ *しかし }

以上のように、シカシが用いられると、話し手と聞き手に共有の知識の集合の中で、ある要素から別の要素へ光が当てられ、それによって話題が転換される。ゆえに導入される話題はすでに話し手と聞き手の共有知識に存在する要素でなければならない。とすると、pもqも話し手と聞き手の共有知識というひとつの実体の二つの側面と考えてもよいのではないか。また、その意味で、シカシのpとqは、転換とはいいながらも、サテやトコロデとは異なり、pとqの間で連続性を保持していると言える。

以上の議論から、シカシの「話題の転換」という機能がシカシの基本的意味から説明されるこ

とが示された。

4-4. 4. の ま と め

本節では、トコロガとシカシの前後 p と q が形成する関係をそれぞれの基本的意味として整理した。トコロガの基本的意味は、p と q が話し手によって意図的に対比されていることを示すことであり、シカシの基本的意味は、あることがらに p という側面が存在すると同時に、それと異なるカテゴリーに属する q という面が存在するというを示し、結果的に「q に注目せよ」ということを表示することである。

両者の違いを理解するには、次のような比喻が有効ではないか。トコロガの p と q は紙芝居の絵の一枚一枚に相当する。紙芝居では、ある絵と次の一枚の絵は話の筋すなわちスクリプトに沿って決定づけられている。劇的な効果を演出するためには、たとえば絵 p ではヒーローが悪党に負けそうになっているところを見せておいて、次に絵 q でヒーローがみごと逆転し、悪党を打ち負かしている絵を見せればよい。このように p のあとで q を提示することは紙芝居の語り手によって表現効果を高めるために意図されたものである。

一方、シカシの p と q はサイコロの目がかかれたひとつひとつの面に譬えられる。それぞれの面は一つのサイコロに付属している。サイコロを転がせば、p という面とは別の面 q を見せることができる。いわゆる逆接では、q を示すことにより、p とは異なる q の存在にも聞き手の注意を向けることができる。また、サイコロの一つの面を見せると、他の面は見えなくなる。q を見せることにより p を見えなくすることが話題の転換である。

このように同じ「逆接」という機能を持っていてもそれを支える基本的な部分ではトコロガとシカシは大きく異なっていることが明らかになった。

5. 物 語 性

先に、トコロガとシカシの違いは談話の組み立て方の違いをも反映することがあり、さらに、トコロガの用いられる文脈としてもっとも多く見られるのは、物語文 (narrative) であることを述べた。非常に興味深いのは、トコロガの他にも物語文によく見られる形式が存在し、さらに、それらがトコロガとよく似た特徴を持っているということである。具体的には、次のような諸形式である。

- (26) さっそくこの着想をもとに、いろいろ工夫して実験したところ、みごとに成功した。

(『歴』)

- (27) いらいらしていると、その倉庫や建物をまかされているお役人、倉津麻呂という老人がやってきた。

(『竹』)

- (28) 海面からそびえている山の周囲を、二、三日ほど漕ぎ回っていましたよ。すると、ある日、山から人がおりてきた。
(『竹』)

まず、(26)のようなタトコロの後件 q には話者関与性の高い述語は現れにくい。

- (29) ディズニーランドにでかけてみたところ、??私は子供のように興奮してしまった。

cf. ディズニーランドにでかけてみたところ、新しいアトラクションができていた。

(27)の「発見のト」(久野 1973, 豊田 1977, 1979)についてはすでに、後項 q が「視点のある人物が客観的に観察し、報告し得る出来事を表す」(久野 1973)ことが指摘されており、やはり話者関与性の高い述語が生起しにくい。

(28)のスルトも発見のトと平行的であり、「発見のスルト」と名付けておく。発見のスルトは新規獲得情報に続けて用いることができない。

- (30) A 「お婆さんは川で洗濯をしていたんですよ。」

B 「そうですか⁶。*すると、大きな桃がどんぶらこ、どんぶらこと流れてきたんですよ。」

つまり、本稿の言葉で言うなら、すでに話し手のスクリプトに書かれている p と q しか接続できないということであろう。

このようなトコロガ、タトコロ、ト、スルトのいずれにも共通するのは、話し手が自分の知っていることを自分とは関わりなく客観的に、物語を聞かせるように順序よく提示していく文脈で用いられるということである。このような文脈を「物語性」のある文脈と名付けることにする。これらの形式の前後 p と q は話し手のスクリプトあるいは「p: 動作 → q: 発見の内容, 動作の結果」のような時系列上の生起の順によって決定されており、提示される情報の順序を変えることはできない⁷。また、先に述べたように、これらの形式は物語文に頻出するという特徴がある。トコロガの用法にみられるように、p と q を意図的な配置で提示し、聞き手にサスペンスを味わわせることを狙うという談話の構成の仕方は、まさに物語文にこそ相応しい。

また、トコロガについて後件 q の話者関与性が低いことも、「物語性」という観点から捉え直すことができる。物語性のある文脈においては話し手はいわば「語り手」に徹することが必要である。それゆえ、自分の考えを表現したり、質問、命令など聞き手に働きかけたりすることができないのである。

このように日本語では、談話の構成の仕方の違いが接続語の使い分けに反映することがある。話し手が語り手に徹して物語を聞かせるように情報を提示していくという談話の構成の仕方はおそらくどの言語にも存在するが、日本語ではこの種の談話が特定の接続形式によって表示されて

⁶ ここでの「そうですか」は、下降のイントネーションをとらない、新しい情報の入力を示す。

⁷ Labov (1972) は、物語 (narrative) では節が継時的な順で並べられている点が特徴的であると述べ、最小の物語 (minimal narrative) を「継時的な順で並べられている二つの節の連続」と定義している。

いるというのは大変興味深い現象である。今後さらに分析を深めていくべき課題であろう⁸。

6. 結 語

本稿では逆接接続語の二類型をトコロガとシカシを例にとって考察した。

トコロガの基本的意味は、p と q が話し手によって意図的に対比されていることを示すことである。一方、シカシの基本的意味は、あることがらに p という側面が存在すると同時に、それと異なるカテゴリーに属する q という面が存在するというを示し、q に注目させることである。また、両者の違いは日本語の談話の構成の類型にも関わっていることが示唆された。

本稿がトコロガとシカシの基本的意味の解明を通して結果的に行ったのは従来の「逆接」という概念の解体であったと言える。今後は同様に「順接」「並列」といった概念も再検討して見る必要がある。その結果、従来の接続詞あるいは接続関係の分類は再構築を迫られることになるであろう。さらに、談話構成の仕方の類型というものは他言語にも存在するののかも大変興味深い問題である。

本稿で示した分析は従来の接続語の分類を見直し、日本語の談話構成の特徴を明らかにするための一歩である。

参 考 文 献

- 市川 孝 (1972) 「文章論」, 文化庁(編)『国語シリーズ 国語教養編 7 文章表現法の問題』, (『覆刻文化庁国語シリーズ X 文章の構成・表現』1975, 97-125 教育出版に再録).
- (1978) 『国語教育のための文章論概説』, 教育出版.
- 岩澤治美 (1985) 「逆接の接続詞の用法」, 『日本語教育』56, 39-50.
- 北野浩章 (1989) 「「しかし」と「ところが」——逆接系接続詞に関する一考察」, 『言語学研究』8, 39-52.
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』, 大修館書店.
- 佐久間まゆみ (1990) 「接続表現(1)」, 寺村秀夫(編)『ケーススタディー 日本語の文章・談話』, 12-23. 桜楓社.
- 佐治圭三 (1970) 「接続詞の分類」, 『月刊文法』2-12, 28-39.
- 多門靖容 (1992) 「文章の談話分析——「しかし」前後件の後続展開調査」, 『日本語学』11-4, 56-62.
- 塚原鉄雄 (1969) 「連接の論理——接続詞と接続助詞」, 『月刊文法』2-2, 68-74.
- 豊田豊子 (1977) 「「と」と「～とき(時)」」, 『日本語教育』33, 90-106.
- (1979) 「発見の「と」」, 『日本語教育』36, 91-105.
- 永野 賢 (1984) 『文章論総説』, 朝倉書店.
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』, 角川書店.

⁸ 談話構成の方法にこのような類型が見出されることは、日本語に「わがこと・ひとごと」(渡辺 1991) といった文法カテゴリーが存在することも視野に入れて体系化されるべきであると思われるが、詳しく論じる用意はまだない。

- 横林宙世, 下村彰子 (1988) 『外国人のための日本語例文・問題シリーズ 6 接続の表現』, 荒竹出版.
 渡部 学 (1989) 「「しかし」の機能について——しかし, but, mais の対照」, 未公開修士論文, 大阪大学.
 渡辺 実 (1991) 「『わがこと・ひとごと』の観点と文法論」, 『国語学』 165, 1-4.

- Labov, William. 1972. *Language in the inner city*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
 Ochs, Elinor. 1979. Planned and unplanned discourse. In *Syntax and semantics* 12, ed. T. Givon. San Diego: Academic Press.

用例出典

- I, II……山田太一『ふぞろいの林檎たち I, II』, 新潮文庫.
 朝日……『朝日新聞』
 華……赤川次郎『華麗なる探偵たち』, 徳間文庫.
 岸……山田太一『岸辺のアルバム』, 新潮文庫.
 竹……星 新一『竹取物語』, 角川文庫.
 東……坂元裕二『東京ラブストーリー』, 小学館.
 普……沢木耕太郎『普通的一天』, 『王の闇』, 文春文庫.
 メ……宮本 輝『メインテーマ』, 新潮文庫.
 モ……森 禮子『モッキングバードのいる町』, 『芥川賞全集』, 文藝春秋.
 歴……平田 寛『歴史を動かした発明』, 岩波ジュニア新書.
 別……渡辺淳一『別れぬ理由』, 新潮文庫.
 録……『録音機』, 『言語生活』.